

卷頭言

新しい「食料の時代」の到来

京都大学 名誉教授 末原 達郎

新しい『食料の時代』が到来しつつある、と考える。2024・25年度には、不思議なことがいくつも重なって起きた。一つは、異常な気象状況が依然として続いていることである。6月から気温が上昇し、線状降水帯による大雨が発生する一方で、雨の全く降らない地方も数多く出てきた。これまでの温帯に属する日本の気候条件とは異なる現象が始まっていると、言わざるをえない。それももはや「異常気象」というよりはむしろ、「常態化した気候」になっている。今一つは、「コメ不足」が起きたことである。単に「コメが不足」しているというわけではなく、コメという食料に、人々がアクセスできない状態が起こったと言えるだろう。これは、アマルティア・センの定義によれば、「飢餓」の条件にあてはまることになる。よく知られるようにセンは、「飢餓とは、十分な食べ物を持っていない人々を特徴づける言葉である。十分な食べ物がそこにはないという状況を特徴づける言葉ではない。」(アマルティア・セン『貧困と飢餓』p.1、岩波書店)と定義づけている。

日本にとってコメ不足が起きたのは、極端に天候が悪かった1993年を除けば、ほぼ60年ぶりである。しかしそれ以前にまで遡れば、よく知られるように毎年コメ不足が起きていた。1960年代に入ると水稻の生産量は毎年1,200万トンを超えるようになる。一方の消費量は1960年代後半以降1,200万トンに届かなくなる。需給のバランスが崩れ、結果的にコメの古米在庫量が増え、生産調整へと農政の転換が起きていった。歴史的に見ればこの時代のみ、日本のコメ不足は解消されていたのである。

この時代の農業政策は、「効率化の時代」の農業政策であったと捉えることができるだろう。全世界に市場経済化が推し進められている中で、日本は世界中から必要な食料を買い付けることができていた時代である。農業生産への出費を減らし、土地生産性と労働生産性が主要な指標として重視された。農産物も工業製品と同様に効率化が求められたのである。この時代には、絶対的な食料不足を心配する必要がなかった。貿易黒字を利用して、世界中から農

作物を買い集めることができたからである。

どうやら昨今は、こうしたことが不可能になってしまっている。筆者がこれから到来する時代を「食料の時代」と位置づけるのは、二つの問題が日本に襲いかかってきているからである。一つは気候の変動により、これまでのような農業生産が続けられなくなっていること。今一つは、市場経済の原理が世界中で通用する原理ではなくなってきており、さらに日本は貿易黒字を確保できなくなっているからである。



このような時代に、日本の農業政策のかじ取りをすることは、とても難しい。なぜなら、今までの延長線上に条件を整えることでは、未来を予測できなくなっているからである。今後はフレームワークそのものの転換が、必要とされるだろう。そのためには、短期的ではなく、五年、十年の月日を要しても構わないから、全く新しいフレームワークに基づく、食料確保政策の提示が必要となってくるだろう。それは、農業政策が最も重要な政策になってくることであり、農水省がこれまで以上に重要な省庁になってくることを示している。

それではなぜ、「農の時代」とせずに、「食料の時代」としたのか。これから社会は、「食を前提とした農業生産」の時代となっていく。「食料」を確保することこそが重要であり、そのための要件として「農」が必要となってくるからであって、その逆ではない。今の時代に反応するのは、都市民が大多数の国民であって、農家だけではない。

現代は自然環境に未曾有の変化が起きており、経済システムにも大転換が起きている。そのような「食料の時代」に、新しいフレームワークを作りあげることは、農業政策立案者にとっても、あるいは研究者にとっても、とてもやりがいのある時代に入ったと思うが、いかがであろうか。